

北山茂夫

萬葉集とその世紀
上

新潮社



北山茂夫

萬葉集とその世紀
上

新潮社版

萬葉集とその世紀（上） 定価一五〇〇円

昭和五十九年十一月三十日 発行
昭和六十年一月三十日 二刷

著者 北山茂夫
発行者 佐藤亮一

発行所 東京都新宿区矢来町七十二番地
株式会社 新潮社

電話 東京（總）五二二（營業部）

東京（總）五四二（編集部）

振替 東京四一八〇八 一六二

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-355401-1 C0021

Moto Kitayama, Printed in Japan, 1984.

萬葉集とその世紀（上）

目次

総序 萬葉の世紀	7
三つの歴史的場面	7
全時代をどう区分するか	20
貴族集団と地方民	24
第一章 伝承歌の世界	35
第二章 萬葉の世紀への流れ	51

第三章	齊明女帝とその周辺	61
第四章	近江朝の抒情歌	93
第五章	壬申の内乱は叙事詩をうんだか	139
第六章	天武・皇后の共治のもとに	189
第七章	宮廷歌人柿本人麻呂	235
第八章	人麻呂の時代	289

萬葉集とその世紀（上）

総序 萬葉の世紀

三つの歴史的場面

『萬葉集』とわたくし

わが『萬葉集』は、現代にまでのこる最古の歌集である。全二〇巻、およそ四五〇〇首の歌を収めている。

わたくしは、青春時代このかた五〇年近くこの古代の歌集に親しんできた。古代政治史を専攻するようになつてからは、七・八世紀の農民の諸状況、またその心情を示す史料を、ここに捜し求めるようになった。その後あまたの歳月を経て、ようやく文芸としての『萬葉集』を享受し研究する立場に移ってきた。そして、萬葉の時代や歌人たちについて、著作、論文の多くを書いた。

これから書こうとするこの本は、『萬葉集』についてのわたくしの探求と成果にもとづく人間記録である。わが研究の集大成という性質をもつであらうけれど、より多くの創意を加えることを深く心に期している。そして、そのすべてを語りつくしたい。

人間記録とあえていったのは、ほかでもない。『萬葉集』は、古代貴族の歌集であるが、わたくし

は、その内面に、その階級的制約をこえるヒューメンな抒情文学的発現を見出し、それに現代からの評価を与えたいとねがうからである。したがって、書かれるものは、ヒューメン・ドキュメントとしての特質をもつようになる。まず、年来、著者が持ってきた『萬葉集』研究についての独自の立場を表明しておきたい。

この古代の大詞華集に存して、『古今和歌集』、それ以後の勅撰、私撰の歌集にまったく欠落している傾向、作品とはどんなものであろうか。これにたいしては、さまざまの回答がだせるであろう。何よりもまず作品をあげて回答へと話をすすめることにしよう。それらの作品は、年代順になっている。三つの歴史的場面がつきつきと現われてくる。

柿本人麻呂の登場

最初に、『萬葉集』巻一から次の二篇の長、反歌をぬきだそう（末尾の漢数字は『国歌大観』の歌番号である）。

吉野の宮に幸しし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌

やすみしし わご大王の 聞し食す 天の下に 国はしも 多にあれども 山川の 清き河内
と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば 百磯城の 大宮人
は 船並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕河渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高
知らす 水激つ 滝の都は 見れど飽かぬかも 三六

反歌

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む 三七

やすみしし わご大王 神ながら 神さびせすと 吉野川 激つ河内に 高殿を 高知りまし

て 登り立ち 国見をせせば 豊なはる 青垣山 山神の 奉る御調と 春へは 花かざし持
ち 秋立てば 黄葉かざせり 二に云ふ、黄葉かざし 逝き副ふ 川の神も 大御食に 仕へ
奉ると 上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も 依りて仕ふる 神の御代
かも 三八

反歌

山川も依りて仕ふる神ながら激つ河内に船出せすかも 三九

柿本人麻呂の名を知り、またこの歌人の相聞歌（恋の歌）のいくつかに興味を覚えてゐる読者でも、はじめてこの長、反歌二篇を口誦さんで、その流れるような快い調子にもかかわらず、奇異の感じにうたれた人々が多いのではなからうか。慣れ親しんできた短歌とは、まったく別様の文学世界だという印象が強いであろう。この二篇について詳細な考察は、本書の二六三ページ以下にあるが、ここでは、作品の成立事情などについてごく簡単にふれておこう。

吉野離宮の由来

『萬葉集』には、これらの歌が作られた年月日について明記されていない。考証を要する一問題であるが、ここでは、いちおう持統天皇が即位した直後の時期と想定しておこう。

この女帝は、近江朝の天智天皇の娘の一人、讃良皇女で、天皇の実弟、大海人皇子に嫁した。六十七年一〇月、天智の死の直前に、皇嗣をめぐる暗闘がおこり、大海人は、身に迫る危険を感じ、妃皇女らを伴って吉野離宮にのがれた。皇太弟という地位をすてての行動であった。

大海人は、山間の離宮にあつて、妃と密謀をねって、ついに、翌年六月の末近くに叛旗をひるがえし、亡き天智の後継者、大海人にとっては甥にあたる大友皇子と天下を争うことになった。これを壬

申の内乱という。そして大規模な戦争のあとに、勝利して新王朝を飛鳥浄御原宮でひらいた。これのちに天武といわれる天皇である。妃讚良皇女は、皇后に冊立された。かれらにとっては、吉野離宮は、新王朝成立の原点という歴史的重みをもっていた。

六八六年七月に、天武は、再起不能の病いの床に横たわり、大権の行使は、皇后と皇太子草壁の手に委ねられた。天武の歿後においてもこの状態がつづき、草壁の夭折のために、讚良皇女は皇位をふんだ。これを持統天皇という。六九〇年一月のことである。

この女帝は、天武のしのこしたさまさまの国家的事業を遂行しなければならなかった。男勝りの性格であつたが、天皇としての力量は、夫天武に比してかなり劣つていた。それを、明敏な女帝は自覺し、ひどく氣に病んでいたようである。

彼女はひたすら宮廷の人心の安定と統一をのぞんだ。天武の死の前後からそれが動揺していた。異腹ですぐれた青年の大津皇子は、草壁太子のライバルとみられていたが、皇太后は、それを謀略によつて自害させた。この事件は、廷臣のあいだで反撥をつのらせた。

読者のなかには、そういう暗い重苦しい持統宮廷の空氣としては、この長、反歌のムードはあまりにも樂天的にすぎるではないか、と疑問を抱かれる方もいられるにちがいない。そうだ、そこが問題だとわたくしもおもっている。

女帝は、在位わずか八年のあいだに、二九回も、都からかなりの距離もある吉野離宮に、群臣を伴なつてでかけている。年に五回というのが三度もある。これは、たしかに異常というべきであろう。人によつては、これは、吉野での神事にかかわる行幸ではないかと憶測する向きもある。しかし行幸の月がまちまちであつて、恒例の神事とはうけとれない。のみならず、神事についての形跡は全然みとめられない。それは、例の多い民俗学的な思いつきの話として退けねばなるまい。

持統女帝の思惑と人麻呂

この、たび重なる行幸の真因は、少しふれたように、その時期の宮廷政治の内部にひそんでいる。さらにいえば、持統女帝その人の政治的志向のなかにある。彼女は、壬申ゆかりの場所としてことさらに重視し、ここに行幸することによって、天武の謀議、拳兵と勝利、新王朝の樹立を、群臣に想起させようとのそんでいたにちがいない。われらも、そこが、新王朝の原点であるという歴史的認識をもっている。女帝の思惑を、政治的な意味においてまことにもっともだとおもう。

女帝は、内心にその想いを秘めて、壬申ゆかりの吉野離宮を讃めたたえる長歌の制作を欲した。それは、はじめから儀礼の歌という性格をおわせられている。廷臣のなかから、誰かをその儀礼的詞章の作者として起用せねばならなかった。

柿本人麻呂は、由緒に富む古い貴族の家に生まれ、すでに早くから相聞（恋）の歌のすぐれた作者として、宮廷の内外に名声が高かった。わたくしの研究では、すでに、持統は、皇后時代から人麻呂に着目して、起用していた。草壁太子の死にさいしても、人麻呂に命じて、その挽歌を作らせている。読者は、『萬葉集』巻二挽歌の部の一六七―一六九番の歌を見てほしい。本書の二三九―二四〇ページにもそれを掲げている。人麻呂は、少し前から、女帝の御用歌人であった。宮廷歌人といいかえてもよい。この二篇の長歌も、そういう密接な関係のなかから生まれたと判断できるのである。それらの成立事情はひとまずこれくらいにして、長歌そのものの内容について少し考えてみることにしたい。

まず第一に、この儀礼歌は、持統女帝が、ゆかりの古い離宮のほかに、吉野に新しい宮殿を建造したことを明示している。この事実、これまでの研究者に見のがされていたか、それともごく軽く考えられたようである。しかし、わたくしは、この儀礼歌の成立の前提として、離宮の新造をきわめて重く考える。女帝は、「河内」に臨んだ場所に高殿、すなわち高樓を設けた。そればかりでなく、群

臣のためにも、何らかの設備をととのえたはずである。そして、この新造の離宮は、退位後のそれをもふくめて前後三〇回に及ぶ行幸の場であつた。「滝の都」は、その初発の姿容を謳歌した歌人のうるわしい言葉である。女帝は、のちに、藤原宮とその都城を壮大に営むが、そこが、常住の都であり、「滝の都」は、新王朝の原点に設けられた離宮で、この二極を、女帝は、かくもひんぱんに往来して、政治を指導したのである。

つぎにここで問題になるのは、作者人麻呂の文芸的姿勢であろう。二つの長歌は、かれの強烈な主観に支えられているのだが、それと同時に、宮廷人の心情をも代表して歌いあげている。おそらく、女帝の思惑は、まさにその点にあつたであろう。吉野離宮をほめたたえるのは、その支配者である天皇の現世的存在を謳歌することである。天皇は、ここでは、現人神という觀念で讃仰されている。それが古代において何を意味したかは、本書の人麻呂論のなかでもういちど深く考えねばならない。

われらは、『日本書紀』の卷二九、卷三〇、また『萬葉集』の女帝のいくつかの作品によつて、この帝王の事蹟あるいはその文芸意識に近づき、これを知ることができる。しかし、女帝を中心としたこの時期の宮廷のイメージを創造的に現出させたものは、人麻呂をのぞいてはほかにない。

わたくしは、そこに宮廷歌人の初登場をみとめる。忘れてならないのは、人麻呂の、歌人としての仕事はそれにつきるものではないことである。何よりもかれは、もっともすぐれた相聞歌の作者として活躍し、その作品はひろく宮廷の内外で愛好されていた。読者は、それを記憶にとどめていただきたい。

山上憶良の「貧窮問答の歌」

時は流れる。七世紀から八世紀の前半へと移つてゆく。持統女帝の曾孫にあたる聖武天皇が即位してからもう一〇年近くたつてゐた。天平という年号の時代のはじめの頃のことである。伯耆、筑前の国守（地方官の長）の経歴をふんだ老いたる官

人山上憶良は、つぎの長、反歌をつくつて上官にさしだした。それにも、はつきりした制作年代は記されていない。われらは、『萬葉集』巻五の記載状況から、そう推定しているのである。じっくり読んでいただきたい。

貧窮問答の歌一首 短歌を并せたり

風雜り 雨降る夜の 雨雜り 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしろ
ひ 糟湯酒 うち噉ろひて 咳かひ 鼻びしびしに しかとあらぬ 鬚かき撫でて 我を除き
て 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことごと 服
襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子どもは 乞ふ
乞ふ泣くらむ この時は いかにしつか 汝が世は渡る 日月は 明しといへど 我が為は 照り
天地は 広しといへど 我が為は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 我が為は 照り
や給はぬ 人皆か 我のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 我も作るを 綿も無
き 布肩衣の 海松の如く わわけさがれる 襦袢のみ 肩にうち懸け 伏廬の 曲廬の内に
直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 鶏鳥の 呻吟ひ居る
には 火気ふき立てず 甑には 蜘蛛の巣懸きて 飯炊く 事も忘れて 鷄鳥の 呻吟ひ居る
に いとのきて 短き物を 端截ると 云へるが如く 楚取る 五十戸長が声は 寢屋戸ま
で 来立ち呼ばひぬ かくばかり 術なきものか 世間の道 八九二

世間を憂しとやさしと思へども 飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

八九三

山上憶良頓首謹みて上る

「貧窮問答の歌」という詞書は、おそらく憶良自身が付したものであろう。問うのは、冬の夜の貧者、つまり作者らしい人物である。そして、それにこたえるのは、極貧者、すなわち隣家の農民。二人の対話のスタイルをとっているが、内容は、作者憶良の自問自答とみるべきである。

読者は、この問答歌から、どういう感銘をうけられたであらうか。それをまず聞きたい。この作品は、とくに表現のぎこちなさなどを理由にさんさんにくさされ、低い評価しか与えられなかった。アラギ派の先人島木赤彦らの作品評にそれが露骨にでている。はたしてそうであらうか。ぎこちなさといわれるものは、拙劣を意味せず、作品そのものの性格からの必然の説得的な語り口とうけとれないだらうか。

ともあれ、この大作がまともにとりあげられたのは、戦後のことである。わたくしも再吟味を強く主張した一人であつた。しかし、いまにいたつても、この作品をめぐる論議が、高い評価におちついたわけではない。むしろ、その決着は、今後の研究にのこされたというべきであらう。

貧窮という社会的現象は、人麻呂の時代にも存在した。農民の逃亡が跡をたたず、なれのはては、群盗に身を投ずる者もいた。それらは、『日本書紀』に記載されている事実である。疑う余地はない。むしろ、ありふれた歴史の現象であつた。しかし、人麻呂、またその同時代の人々は、その事象を歌わなかった。

憶良は、歴史上はじめて、貧窮を長歌の主題にしてこの作品を完成した。これは、現代からふりかえつてもめざましい文芸上の転換である。『萬葉集』においても一回きりのことで、その作風を追って制作するものは出なかった。のちに世にでた大伴家持は、憶良の仕事につよい関心をよせて尊敬していたが、この大作には言及していない。『古今和歌集』以後についてはいうまでもなく、完全に無